

JIA news kinki

翔
syo

no.100/2006

創刊100号

秋号





表紙写真：
水墨画「凧 Rin」 大江一夫

表紙解説 - 凧 Rin

自然から学び、
自然を師とし、
風や空気を感じとり、
精神で描く。

そこに感動が生まれ、本当のものが...。
そして、その大事なものは眼には見えない。

CONTENTS

特集

「齋藤裕氏、養老孟司氏の
連続セミナーを終えて」 小山隆治 3

連載

「住宅部会通信2006」 古田義弘 8

「建築家の視点」 石井和浩 10

「都市点描」 江川直樹 13

情報

「JIA News kinki 翔」 寺本敏則 15
100号を迎えて 佐々木純一
太田恭司
井上 守
小南一郎

新入会員紹介

「編集後記」 小南一郎 18

齋藤裕氏、養老孟司氏の連続セミナーを終えて

(社)日本建築家協会(JIA)近畿支部 住宅部会企画委員会

第一回 齋藤裕氏講演会 平成18年6月23日

講演テーマ「初めての地に、初めての形」

第二回 養老孟司氏講演会 平成18年9月30日

一部 基調講演テーマ「ヒトと建築にかかわる壁」

二部 座談会ファシリテーター齋藤裕氏

小山 隆治

(小山隆治建築研究所)
(住宅部会企画委員会委員長)



齋藤裕氏の講演会では、テーマを「初めての地に、初めての形」と題して、

カラダッシュの鉛筆を知っていますかという問いかけから始まった。それはすると滑らかに書けるスイス製の鉛筆で、書いた紙が「君は天才だ」と言ってくれる鉛筆だと言われたことが冒頭の印象深い話だった。色鉛筆ではダウエントのスタジオタイプを薦められた。それは、建築をデザインする人のために用意されたとも言えるべき微妙な色が揃っているというのだ。齋藤さんとの事前打ち合わせの折に、建築を学ぼうとしている高校生を呼んでくれないかと言われたことが、ここで初めて分かった。彼は建築を志す者の初心とはこういうものを探ることなのだと伝えたかったのだろう。

そして前半の45分あまりを使い、建築の楽しさを知ること、経験の中で知った感動を、「少年のような、バカなような、有頂天になるエネルギーで、気持ちいい、いいなあ、といえる豊かな空間を創ることが必要だ」と言われた。それには「社会の～」とか「社会に開かれた」「環境に優しい」とかという言葉を使うことはないと言われてきたのだ。彼には、今建築に問われている何よりも、自分の中で発見した「感動」を「かたち」にかえて「人に巡り合わせる」ことの方が先に大切で必要なことではないかというアンチテーゼがあったのだ。

人を感動させる凄く単純なものの中に、豊かさや他にないオリジナリティーが生まれる。そこには生命感がやどり、人に生き方さえ伝えることが出来、その感動によっては明日の都市像や今改めなければならない生活像が見えてくる。これこそが何をあいても建築家に必要な社会貢献であると齋藤氏はいう。

建築と建物は違ふとしきりにいいながら、中盤、世界中で最も優れた建築を紹介した。それは、スカルパのプリオンベガ墓地、ライトの落水荘、アアルトのヴィラマイレア、キャンデラのバカルディの製造工場、バラガンのギラルディ邸、サン・クリストバル、そしてカーンのフィッシャー邸、キンベル美術館であった。

そのあと齋藤氏は自らの建築に託した思いを、自作を紹介しながら語ってくれた。住宅に革命は起こせませんかと聞かれて始まったと言う「葬居」に始まって、「好日山荘」「タスコ・ジャパン」「百日紅居」「好日居」「るるる阿房」を追って見せて頂いたが、その一つ一つのコンセプトへのこだわりは、材料の追求に留まらず、工法、それはよほど建築の通念たる工法を覆す新たなジャンルの建築かと思わせる程の力のみなざる齋藤建築を形づくっていた。実際の物で考える、出来上がりつつある建築の前に立ってじっくり感じて、見て、考え、材料を育てるとさえも考える彼の姿勢には、脅威ともいえる徹底したこだわりを感じざるを得なかった。

齋藤氏はさらにいう。

- フォームとシェイプ、何が違うのか、プロポーションを作る術を勉強しなければならない。まず正方形で建築を作る。次に正方形で



齋藤裕氏、養老孟司氏の連続セミナーを終えて

ないものを作るとだんだんプロポーションがわかってくる。旋律、形の秩序、リズム感、メロディー、音楽の分解、が建築のプロポーションの分解の方法になる。空間に生命感を与えることが大事なのだ。体で感じないと言葉では伝えられない。建築の空間の気配に、色、光、香、音(五感を)を分解して入れてみると答えが見えてくる。その色、光、香、音を建築に取り入れる。これを考えて組み立てたものが「建築」。これができないと「たてもの」になってしまう。建築には呼吸度がある。呼吸していないのは建築ではない、と。

最後に、「自分の五感を信じて繊細に自分の時間を過ごし、自分の仕事にいつも手を入れて、直せるなら直したい。夢を見てその度にポケットにやりたいこと、宝物がたくさんできる。そして自分の責任を背中にのせて生きて行く。これが建築家の生き方だ」と告げ、これからの齋藤建築を更に期待してほしいと終えられた。

養老孟司氏の講演会では、テーマを「ヒトと建築にかかわる壁」と題して、解剖学者である養老氏は、解剖結果を説明するときに必要な「説明の構造」を「建築」と見立て、「ヒト」にあっては、「意識と無意識」について語られ始めた。まず、説明の原則は、構造の説明・目的論的説明・歴史的説明・発生的説明・情報論的説明の五つからなると説明され、最後の「情報論的説明」では、その物体が備えている形あるもの(色も含めて)が何を意味するのかと説明することであり、これが建築で言う「デザイン」を指すのではないかと言う視点から、「カブト虫の角はなぜ必要なのか」など、大変楽しく興味深いお話から聞かせてくれた。

その後「ヒトは無意識には建築を作れないですね」と繋ぎ、「意識」とは脳が働いていることであり、それは「秩序」を生み出す行為「秩序活動」で、「無意識」とは、意識がない状態、言い換えれば「無秩序」な行為をいうと語られ、人が起きている時に作られる意識的な秩序行為と無意識的な無秩序行為は脳に平生感を失わせる。睡眠時にはそれと等価の整理整頓がなされて、エントロピーを下げる。つまり、人は睡眠を取ることで平生を保ち落ち着くのだと説明された。

このことは図書館を例にあげ、氏は「皆さん知ってますよね。図書館！開館時にきれいに書棚に並べられていた本が、人が来るとそこそこに散らばってバラバラになるでしょ、閉館時にはね、もとへ戻す作業がされるので、次の日にはまた開館できるんですよ。あれと一緒にですよ」と笑いながら楽しく説明されたのだ。さらに氏は続ける。「都市活動に於いても同じことが言えて、ゴミは、捨てればその場は美しくなるのですが、その後は、焼却段階でガスと熱を放出することになるでしょ！温暖化になっちゃうんだよね。つまり、何が言いたいかって言うと、いつまでたっても秩序は導入出来ないって言うことなんですよ」、、、、と、養老氏のおちゃめな話し方に、会場はなんだかユーモラスな雰囲気包まれ、みんななるほどと笑みを浮かべながらうなずいていた。つまり、そういうことを理解して社会構造を見抜いた上で、社会と向き合う必要があるのだと強く協調されたのだった。

それは般若心経にも出てくるものであり、中国では、「大道を忘れると仁義無し」ということわざがあるといわれ、「自然の流れたる大道を忘れると、老子、孔子が仁だの義だのと言い出して、世の中が悪くなったことの証になった」という。つまり、人の考えで秩序を作り上げるために行う行為が、余りに行き過ぎると、「脳」に頼った考えが行き過ぎた社会が出来、必然的にも無くてはならない無意識活動を認めない社会、意識過剰な悪循環な社会が生まれると



齋藤裕氏、養老孟司氏の連続セミナーを終えて

いう。それを「脳化社会」と言われ、これも般若心経に書かれていることを例にあげ、人は「五蘊(ごうん)」という「色、受、想、行、識」の五つのものに支配されているのだと説明された上で、脳化社会になることへの危惧を語られた。

さらに人間は、唯一言葉が喋れる動物であるが、言語能力が過ぎると他の能力を掻き消すのだそうだ。「感覚とは知覚することで、違いを検出する能力の事をいうので、総ての事物はその違いの上で認められるべきだ」とし、言葉は何もかも「同じ」に括ってしまう性質があるから、あの「りんご」とこの「りんご」は、言葉は同じでも物は違うことを知らせない。また、人は絶対音感を必ず持って生まれて来るが、言葉を喋ることで伝え合うので、必要無くなって退化するのだという。つまり音楽をする方が、小さなころから音楽に触れていないと絶対音感は生まれれないと言っているのは逆で、退化しないように耳の鍛練を絶やすなということなのだそうだ。知覚することへの能力を失うことで、「違う」という感覚が感知した通りの「伝え方」が「言葉」を持ってもはなから出来なくなることへの危惧を話され、言葉で括る「同じ」が感覚的にも蔓延することで、感知することすら出来なくなると話された。「言葉」に偏重した考えは、一神教での、物事の捕らえ方の末に一つの神が在るという考え方と良く似ており、日本という文化での神とは「八百万の神」といって総てのものに神が宿るとして、その各々の違いを知っている文化であると括られた。

最後に養老氏は「もともと同じであるかどうか、その違いを気付くこと、これを「クオリア」といいます。他人に説明できるものを指し示す言葉で、英語でいう「クオリティーquality」のことなんです。感覚で感知したその違いは、目の前にある当たり前なものなので、そのもの自体をしっかりと感知して受け入れることを忘れないで欲しい」と括られ、「皆さんもゆっくり考えてみて下さい」と告げて終えられた。

養老孟司氏の講演会の後、齋藤裕氏を迎えての座談会では、

まず、齋藤氏から「建築と建物の違い」について「寝ている時にも考えたり、思い悩むことがある。技術だけを考えて作るのなら誰だってできる。もう一つ、個人の要素を入れないと建築にならない」と括られた後に、養老氏に質問された。

齋藤氏「良い夢を見て才能を導く話を聞きますが、どうやったら良い夢が見れますか、また夢についてお聞かせください」。

養老氏「先程意識の話をしました。意識をもって行動することは、ある種の抑制することでもあり、それをはずすことが寝ることとって良いでしょう。物づくりしている人は入れ込むでしょ、そうすると眠れなくて、障害が起こるんです。これがスランプなんですね」。

休息することで、また全く別な心から楽しいことをすることでスランプから抜けるといふ。集中し過ぎてスランプになるということは、とかく落ち入りやすいことで、ぐっと詰め込んでいくら考えても出てこない時の後の何も関係のない瞬間に、何かにピンと来てふと閃くこと、これは抑制がとれて、安定性をもとめて、脳は正常化し、ある感知したものを切っ掛けに「閃く」ことになるのだそうだ。続けて養老氏は、アルキメデスが、思い悩んだ後、風呂に入って発見したことで、有頂天になって裸で外に飛び出して大喜びしたというエピソードを話された。「これは閃いたことへの喜びにまさって、この瞬間に自分自身が変わったことに気付いて喜んだのだ」と話された。

齋藤氏「人が考えないことが出来ること。虫好きな建築家はどうも虫



齋藤裕氏、養老孟司氏の連続セミナーを終えて

のようなものを作ってしまうように、それくらいの個性をもっていないとダメなんじゃないかと思うんですが、養老さんはどうですか」

養老氏「人の作ったもの、人工物には興味がないのです。私は四歳の時に父を亡くしたので、死から始まっているような気がして、だから解剖なんてやってんでしょね」

アルキメデスの話から続けて、何かに気がついた人はその前の人と違う人になっていることを知らなければならぬと話され、人は大抵、個性を大切に自分を守りましょうというのだが、自分自身は創っていくもので、常に何かに気付いて「補完」しているもので、変わることが大切。現代では「自分探し」なんてバカなことを言っている。これは言葉でいうと対義語といわれる「ある」と「ない」では反対の言葉として使われるが、対義であって反対ではなく、「～がない」と言っても、何とくらべて「ない」のかとか、説明する時には別の物が「ある」から「ない」など、補完関係にある。内と外は二つで世界だとか、男と女は両方で人間だとかいうように「いる」と「いない」も補完関係にあるという。さらに、喧嘩の基などは、「これが常識だ」と言い過ぎるところに始まっていて、話を聞いて補完した考え方をもって付き合えば、そんなことにはならないと話された。

会場から「養老さんは、地域保存とか古いものの保存と言うことに関してどうお考えですか」

養老氏「人は何に影響を受けているかを考えるべきで、総ての考え方は、地域保存を何でもやって良いのではなくて、人の為にどうなのかって考えることが大切だと思いますね。人の根源的な考え方は原風景や消えた人などに影響されています。新しいものもそうなる可能性があるということですね。」さらに話は遡り、「私は都会の裏山によく入るのですが、かなり荒れ果てて汚いんですね。都市の内っかわはピカピカで、都会に住む人が住宅建てて、庭を作っても手入れしないんでしょうね。都市にとって裏山は庭だと思うんですがね」と都市への思いを付け加えられた。

会場から「齋藤さんは、ルイス・バラガンの本を出されましたが、出されることになった切っ掛けはなんだったのでしょうか」

齋藤氏「そのころ、絵画でいう具象画と抽象画があるということに興味があって、建築にも具象と抽象があっというんじゃないかって思って、バラガンの建築を見るための旅行を始めたんです。バラガンさんはそのころ生きていたのかどうか分からない状態で訪ねていったのですが、自邸の最上階の部屋で人生の最後を待っている状態で、今日までの物を私にまとめさせて下さいとお願いすることになって出版を許してくれたんです。一番興味があったのは、ギラルディー邸です。実はバラガンはある時に建築を止めて別の仕事で大金を稼ぐのですが、その後、このギラルディーさんがもう一度建築を創ってくれと頼み込んで出来たものなんです。だから一番彼の表現が出来ているものだと考えていて、一般のお家のような具象的建築と抽象的建築がある中で、抽象的建築の最も優れたものだと思い興味があったんです」

話は尽きなく、このへんで時間となってしまったのですが、両氏の話の中には、双方共にその人の見ている先にあるものが他人を寄せつけないようにして実はそうではなく、真実を見つめた答えがそこにあることを垣間見せる話でした。

両者の講演会を終えて、

私にとって両セミナーは、合わせてある真実を伴った「像」を見たといえるものとなりました。それは我々作り手からみて、養老氏の言われていた「補完し合う関係」にお二人はあったのではないかと感じたからです。齋藤氏は自分の感覚が何よりも大切だと実践した生き様の中で見せ、養老氏からは人の「物の見方」を、目の前にあるものの「感知の仕方」として、脳化社会にならぬようにと解説して頂いたように思います。

齋藤裕氏、養老孟司氏の連続セミナーを終えて

齋藤氏は「建築と建物の違い」について語られていたが、あの話の中には実に真実がある。大抵の建築家は、感覚的な建築に対して、恣意的感情がある種の社会性を無くするという。齋藤氏のいう社会性は、社会は個人の集りであり、都市はその衣を着た状態であるが故に、個人の感動を呼び起こすものこそ普遍的価値を見出すのだと言っている。またそれを音楽に例えられ、リズムであり、メロディーがヒトの心の根底に響くように、建築に心を架けよと言われた。確かにヒトによってはその個人差によって響きあわない関係もあるであろうが、個と個が響きあうところで互いに認めあえばいい。そこに違いがあり、その違いを知り、認めあえる大らかさのある建築家像が明日に必要とされているということを暗示しているようだった。養老氏の言う「感知すること」を忘れず、言葉に置き換えることを極力慎重になって、自分の感性を持ち続けること。探しもとめ、研究しすることへ、心尽きないように生きることを、改めて確信したのだ。

実に当たり前のことが、当たり前であるが故にそのまま受け止め確信しないと、現実的な意味での社会像と対応出来ないのだ。養老氏は言う、「ヒトは造り上げていくもの、自分探しなどと馬鹿げたことを言っていないで、自分の「個性」を守るには、自分の気が付いたことを自分で自分に補完することなのだ」と。ヒトの成長は微細であり、見せるにおこがましくもあるが、その創られる人の過程を見せることこそが見る者に意味のあるものだと言っているようだった。

そして、建築家は「社会」を言葉にしつつ武器にするが、実は社会とは向き合っていないんじゃないかなと気付かされた。今日ここに開かせて頂いたセミナーからは、私達の目指した「一般に向けて開いたJIA」の在り方に有効性を感じている。

私は養老氏と別れる最後に聞いてみた。

小山「文章を書かれる時に一番大切にされていることはなんですか」

養老氏「それはねリズムですよ。自分らしいリズムがないと読むヒトには伝わりませんね。同じ言葉でも違っちゃうんですよ」そう、ポール・ヴァレリーも言っている、「彫刻や絵画からはそっぽを向いてしまうことができるが、音楽は建築空間と同様に私達を取り囲んで存在するものである」と。

「リズムは拍ではない それは世界のビジョンである。」と言ったのは、オクタビオ・パス。

次は、「音楽で建築を知る」という機会をつくり、また様々な角度から建築家像を考え、我々の建築家像を見て頂くことを企画したいと考えています。

大変多くの方々のご支援を頂いて、この企画が大成功を納めたことに改めて感謝申し上げます。

ありがとうございました。

次回も変わらぬご支援を宜しく願います。

中国「大地の住居を訪ねて」

古田 義弘

(アトリエフルタ建築研究所)



中国河南省 黄土高原の地下式住居「窑洞」を見る旅に、5月12日から16日迄住宅部会の例会として行ってきた。黄河流域に、ゴビの砂漠から飛んでくる黄砂の堆積によって作られた黄土高原。中国の内陸部に広大な拡がりがある。5月の素晴らしい好天に恵まれ、暑さの割に乾燥したさわやかな風に吹かれて、気持ちの良い旅を満喫できた。部会メンバー9名と中国支部JIA会員、そして夫人達と総勢は13名。

上海経由で河南省鄭州に一泊、敦煌の莫高窟と並んで現存する3大石窟のひとつ、洛陽の龍門石窟を見学。北魏時代の築造10万体に及ぶ石仏に圧倒され、その表情の豊かさにさすが世界文化遺産と感銘。しかしながら、パーミヤン遺跡を思い起こす顔のない仏の多くに痛々しさを覚え、宗教の争いが今の世にも続く、その深さをいやが上にも感じざるを得ない。洛陽には中国最古の白馬寺、三国時代の武将関羽の関林があり、神戸の関帝廟もゆかりの寺院でもある。特に白馬寺は日本では弥生時代の古刹だそうで、改めて中国の歴史の深さに感動。煉瓦と、豊富にとれる安山岩か玄武岩の分の厚い黒石がふんだんに使われている。

洛陽近郊には多くの窑洞がみられる。もとはこの地方で一般的な住居だった。数千万人の人達の住かであった。現在はこの地では実際に生活しているものは数少なくなっていて、半ば観光的に見る事ができるものがあつた。ここは完全な地下式のものだ。90才を超える老女が1人床机に腰をおろして我々を迎えてくれた。傍らで家族らしき数人の大人が麻雀に興じている。7~8mの深さ内法は10m四方形もあろうか。アカシアの木が真ん中に植えられた中庭。その四方の壁に数個の横穴がある。巾2~3m奥行は7~8m程天井はホールド状に空間が作られている。床は木やタイルなど壁も天井も土塗りだが快適な空間。驚く程に乾燥して外気温より恐らく3~4度は低そうだ。便所は地上へ行かねばならないものの大家族で暮らすには豊かな生活空間であったのだろうと想像できる。中庭の内壁(外壁というべき?)は藁スサ入りの土塗壁、各横穴の部屋は出入り口が各々煉瓦やタイルで趣向をこらしたアーチを形取り実に表情がある。ここは内陸性の気候故猛暑から冬季は零下10度を越える寒さこの大地に抱かれた住まいは実に快適なのだろう。乾燥しているものの年間降雨量は60mm/mを超え雨季には12時間位降り続くこともあるという。しかしこれ位の雨量は全くこの地下住居には何の問題もない。

翌日には黄土高原を120km程離れたところにある三門狭市の郊外の窑洞を訪れた。このあたりは林檎を栽培しているようで豊かな農村地帯である。見学者も稀なのか町長さんとか役人が迎えて案内をしてくれる。子供や村人がもの珍しげに我々について来た。この窑洞群は下沈式



太原の晋祠



洛陽市郊外の窑洞にて

住宅部会通信 2006

と横穴式とが地形に合わせて混在している。三門狭市は結構近代的な都市でその市街からほんの30分程走ったところで今でも多くの家族が実際に昔ながらの生活をしている。高低差のある地形からくるのだろうか、こちらの下沈式は比較的浅く6~7mの掘り込みの壁を煉瓦で覆ったものや土塗壁のものがある。居室と横穴のアーチは、共に仕上げも一部屋毎に好みどおりに個性豊かに仕上がっている。住民達とも言葉は通じないものの少しながら触れ合いもでき、子供達のはにかみながらも人なつっこい笑顔は多分日本の半世紀前（我々の子供の頃）の感覚なのか本当になつかしいものがあった。

何となくこの大地に抱かれた住まいへの親近感からなのか、時の経つのを忘れてもっと居続けたい気がしたのは私だけだったのだろうか・・・。

次の行程の平遥古城へは黄土高原を4~500km一気に走り抜ける。ポプラ並木が延々と続く麦畑の中、随所に窯洞の跡らしき洞窟が見られ、黄土と同色の煉瓦の民家が平原に溶け込むように点在する風景が今も目に焼き付いている。

BC800年の壮大な城郭都市「平遥古城」。10mもの高さの版築の土壁上に美しく煉瓦で仕上げられた周囲6kmの城壁。その内外の瓦屋根の連続に目を奪われる。数千もあると思われる四合院の民家のたたずまいをつぶさに見学。この明清時代の中国の金融の中心といわれる都市が、今もうまく持続しながら中に入れば立派なホテルやレストランとして生々と活用されている。もう一度訪れて古い商家のホテルに泊ってみたいと思った。この辺りの黒の煉瓦と多様な瓦屋根の造形、古城やその周辺建造物、鎮国寺の屋根、斗組これらは奈良への源流と云いながらやはり距離感は大きく感じられた。

今回の旅行のガイドのウー氏、我々の偏った要望にこたえるべく人選されたなかなかの見識の人物だった。彼の自宅を見せてもらうことになり太原市内のマンションに伺った。此处では住宅は躯体で販売され内装は好きな様に入居者がしつらえる。彼のご自慢の設計を見せてもらった。普通の旅行者には見られない中産階級の現地の人達の生活を見られたのは今回の旅行のひとつの成果でもあった。

食事は毎晩中華料理定番の円卓の宴。結構な中味の濃い料理に堪能。いつもどこで終わるのか筆談も通じない状態、大盛の白飯とデザート西瓜は定番となっていた。



窑洞の入り口にて



三門狭市の窑洞を訪問

ヴォーリス建築に学ぶ「建築家像」

石井 和浩

保存再生委員会
(石井建築設計事務所)

明治末期に来日した建築家ウィリアム・メレル・ヴォーリスが経験から培った思いや志と、実際行なった設計手法を照合させ、ヴォーリス建築やヴォーリス自身が語りかけるメッセージを読み取り、「建築家に求められる視点」という観点から述べることにする。

近江八幡での体験から

ヴォーリスが設計した建築を見ると、来幡初日から体験した近江八幡の気候風土、従来の民家に対する印象や思いが、彼の設計活動に直接的に反映していることがよく分かる。

なかでも、民家の改修では彼自身が感じた民家のデメリットを改善する手法が明快に取られている。特に、台所と寝室を改修すべき箇所として挙げている。

台所は本来的な役割として、大事な食物を作り、家族の健康の鍵を握る場所であり、生命を育てるかけがえの無い場所であるが、従来の日本家屋では暗く不衛生な場所にあった。彼は、台所を直射日光が差す明るい場所に設け、直射日光による殺菌作用も考慮していた。

寝室については、伝統的民家の寝室では不衛生であると考え、寝室を板の間にしてベッドを置き、掃除しやすく計画していた。

また、「スリーピングポーチ」と呼ばれる縁側のような場所を寝室の横に設けてベッドを置き、大きな開口部から入る直射日光によって寝床を殺菌できるようにすることで、病気にかからなくなると考えていた。

幼少期に健康に恵まれず環境を変えて健康の維持に努めたヴォーリスにとって、「健康」とは重要なキーワードであったことが窺える。



ヴォーリス自邸
スリーピングポーチを持つ自邸

以上のものは、現在では一般的な住宅設計となったものもあるが、大正・昭和初期当時にそういった設計を日本の民家にも採用していたことが特筆すべき点であると考えられる。

「健康な建築」と建築の持続性

健康に配慮するというヴォーリスの信念は、住宅設計だけでなく他分野の活動につながっていく。大正当時は不治の病として結核が蔓延していた。ヴォーリスは大正7年に近江八幡にサナトリウム（近江療養院）を開設し、慈善事業としての医療活動を行なった。

その事業の中で特に重要なこととして次のように考えていた。

「患者さんに対して病客と言いなさい。慈愛の精神でもって接しなさい。また、病院は薬に頼らず自然の力で復元するよう手助けする空間であり、自然に溶け込む建築物である。」

建築家の視点 保存再生を考える

また、病院建設の際、ツッカー女史からの寄付が基金となったこともあり、「簡素であるが奉仕の精神に満ちている。人々から寄せられた贈り物を、単なる装飾に浪費すべきではない。ここでは自然が美を与えてくれるのだ」と記すなど、経済性も重要視しながら装飾過剰にならぬよう心掛けていた事が分かる。

経済性の重視は、ヴォーリズ建築ではどの建築物でも一貫して考えられていたことで、軽井沢にあるヴォーリズ建築の設計の際に次のように記している。「建築の目的が、どの様なものであっても、全く簡素な住宅から最も複雑な建物に至るまで、最小限度の経費でもって、最高の満足を請け合うために確かな努力をしてきたことである。」

このように、ヴォーリズ建築は、「健康」を重視するだけでなく、その建物が持続的に使われていくために必要な経済性・耐久性という実用面を十分に考えられていた。

これは決して、経済性のみを最重要視するのではなく、安心した暮らしを長く支えていく為に必要になる耐久性・耐震性を十分に考慮された結果として、経済面にも優れた建築物になるという考えである。平面計画においても使い勝手と構造計画の両面を主に検討し設計を行ない、主要構造物のコンクリートは厳密に打設しているため、強固でかつ耐震性を十分に備えていた。

実は、ヴォーリズの地震に対する姿勢も、来幡初日に生まれて初めての地震を経験し、強い印象として残っていることに拠るのである。

ヴォーリズが重要視している「健康な建築」と建築の持続性の向上は、時代を問わず普遍的に重要なものであり、今現在にも今後にも活かすべき姿勢である。

住宅に対する考え方から

上記のヴォーリズの体験に直接基づく設計思想・手法を見ると、ヴォーリズは日本の伝統的な民家を住みづらいものとして見ていたかと思われるが、決してそうではない。ヴォーリズは滋賀の伝統的な民家を高く評価していた。それは伝統的な民家が地域の気候風土に適応した建物だからである。

滋賀の民家では、冬の寒い北風を考慮して家の北側を極力閉ざし、南側は開口を大きく開けて玄関や客間・縁側を設けられている。

ヴォーリズは、そういった気候風土に適応した建物に、幾箇所のデメリットを克服することで理想の住宅ができると考えていた。

つまり、日本の伝統的な民家を活かしながら、西洋の住文化を融合させることを図ったのである。それは、前述のようにハード面だけでなく、生活改善にもつながることである。

日本の伝統的なハレの空間を中心とした間取りではなく、日本の従来の民家にはなかった「居間」という部屋を日当りの良い南側に設け、居住者の生活を重視した間取りへと改善させた。



ツッカーハウス
保存されることになった病院建築

平面計

画におい

ても使い

勝手と構

造計画の

両面を主

に検討し

設計を行

ない、主

要構造物

のコンク

リートは

厳密に打

設している

ため、強

建築家の視点 保存再生を考える

そしてその居間を中心にし、家族が触れ合える場を作ることが重要であると考えていた。

家族が触れ合い、その中で子供が成長していく。ヴォーリスは、住宅を子供の人格形成に関わる最も重要な場所であると考えていた。「（子供は）我家が、他のどこよりも居心地のよい、愉快なところだと気がつけば、態々いろんな所に行く筈もなく、従って道楽もしません。墮落もしません。」

著書「吾家の設計」の中で「建築の五つの目的」というものを挙げているが、その第三番目に「個性の発展」として、子供の人格形成について述べている。

ヴォーリスの建築設計は住宅を基本に考えられており、他用途の建築についても、住宅設計での考え方が基となっている。

他用途の建築も、利用する人々に対して影響力を持っており、「人格形成の場」であり、「個性の発展」に関わる場所であると考えていた。

彼自身、日本の伝統的な民家での実体験が彼の作る建築物に多大な影響を与え、民家改修で言えばデメリットの改善に努めたのは既述の通りである。

彼の場合、一建築にとどまらず、町や地域コミュニティの育成、つまり「まちづくり・ひとづくり」も視野に入れて建築設計をしており、地域全体の発展とそれぞれの人間の個性を生かすことが共に作用していくことを目的としていた。

求められる建築家

彼は、前述の視点を重んじた上で、このようなメッセージを残している。「建築の風格は人間の人格と同じく、その外見よりもむしろ内容にある」、「建築家は日常生活のために使用する快適で健康を守るに良い、能率的な建物を熱心に求めている建築主の意を汲む奉仕者となるべきである」。

「向上心ある建築家が設計にあたる時、個人的な気まぐれや思いつきで着飾った形骸や自己宣伝のための広告塔、あるいは一般の人々を仰天させるための博物館向きの作品のように心得てあしらうべきではない」。

建築家は「公」の意識を持ち、地域の歴史文化を重んじ、自然環境と人との調和を図りつつ、「人を健康的に育てる建築」を総合的視野のもと、職能人として“奉仕の精神”を持って関わる必要があると、彼が感じていたことが分かる。

様々な問題を内包する現代社会において、建築家も多くの役割を担いながら社会貢献していく必要がある。ヴォーリスが残したメッセージの示す方向性は、我々にとって“羅針盤”となり得るのではないだろうか。

参考文献

- 「吾家の設計」 W.M.ヴォーリス 著 文化生活研究社
- 「失敗者の自叙伝」 一柳米来留(W.M.ヴォーリス)著 近江兄弟社
- 「ヴォーリスの西洋館」 山形政昭 著 淡交社



旧八幡郵便局
NPO法人ヴォーリス建築保存再生運動「一粒の会」
が保存再生を行っているヴォーリス建築

芦屋市若宮地区の震災復興住環境整備を振り返って

江川 直樹

(都市デザイン委員会委員)



2006年6月に、NPO法人・西山文庫のすまい・まちづくりフォーラムがあって、芦屋市若宮町の震災復興住環境整備などについてお話をさせていただいた。若宮地区に関しては、これに前後して、大阪府建築士会のまちづくり委員会の見学会など、いくつかの見学会があいつぎ、地区内の公営住宅の全竣工（5期、92戸）から4年経ったまちの様子を多くの、様々な方々をご覧になっている。

頂いた感想で特に印象的だったのは、大阪府建築士会の皆さんの感想で、「公営住宅がそうとはわからずに、まちに溶け込んで存在している。」というもので、これは、公営住宅のある風景としては画期的だということであった。また、地区内も、震災から復興したとは思えないほどの、普通のまちの風景で、つまり、震災からの復興は、一般的にはピカピカの、なにか、元のまちとは違和感のある、異なる風景になるのが普通なのだが、どうもそうではなくて、しかも、昔は無かった公営住宅まで新しく建っているのに、密集していた昔のまちからはずいぶん隙間もできて明るくなっているのに、住環境としては断然改善された再建になっているのに、いわゆるピカピカの再建の様子が感じられない、つまり、昔からあったような佇まいであるという感想である。だとすれば、思いは実現したということなのだが、さて、若宮の例は社会的な影響力を持っているのだろうか？

若宮地区の再建の概略を以下に述べよう。被災率95%（全壊6割、半壊2.5割、一部損壊1割）の、もともと密集住宅地であったところの再建に際して、当初の市の提案は、全部を集合住宅（公営住宅）で再建する案であり、住民の反対に対する次の案は、地区内の4つの街区のうち、1つを戸建て街区、1つをタウンハウス街区、残りの2つを集合住宅街区にするという案であったが、住民は、まちづくりコンサルや建築家といった専門家と協働で、地区内に小さな公営住宅を分散配置させながら、自力再建する戸建て住宅と混在したまちに再生復興しようという案を市長に提案し、市は最終的に、全面的にこの案の遂行に対して協力し、行政、専門家、住民が一体となって、「新しいが懐かしい町への再生」を成し遂げたというものである。事業的には、もともとの密集市街地を改善し、かつ、震災復興で従来から住んでいたところに全員が戻れる制度として、住宅地区改良、改良住宅の制度を採用したことであり、おおよそ同和地区で採用されることがほとんどというこの制度を、一般住宅地で採用したことである。

そのために、地区内移転を無税で行うことや、強制執行をしないということ、小さく分節分棟した公営住宅を分散配置させながら建築化された路地状の空間（路地状の通り抜け階段など）をまちの道路空間と連続化させること、市民がボランティアに維持できる緑の広場やへた地を地区内に用意すること、などへの行政の協力も大きなものがあり、区画整理で出来たまちとは明らかに違う雰囲気のに再生できている。



若宮地区の密集状況と震災被災状況
(赤全壊、桃半壊、青一部損壊)



震災後5月の市提示案



震災後7月の市提示案



若宮地区全体整備図

都市点描

しかし、これが震災の特殊事例で終わるのではなく、これからの市街地再生の大きな課題である、密集市街地の改善、大規模団地の再生などに、有効な事例として生かされそうかといえ、そう簡単にはいかないと言う声も大きい。

早稲田大学の佐藤滋教授の感想を氏のブログから引用させて頂き、この若宮の意味を皆さんで考えていただきつつ、都市を点描する本稿としたい。

『柔らかい改理事業vs事業主義の罨：震災復興まちづくりの過程では従来の法定事業の方法にもさまざまな工夫が施された。これまでの法定事業のステレオタイプから抜け出して魅力的なまちを生み出している例も少なくない。芦屋市の若宮地区の改理事業はその典型である。事業区域内に心地よく周辺になじんだ「改良住宅」が埋め込まれ、地区内の緑のネットワークが広場や集会所、コミュニティガーデンを繋いでいる。そして、戸建て住宅と集合住宅が調和して一つのまちを形成している。ここでも住民自治が貫かれ、まちの隅々にまで住民の日常的な感性が生かされ表現されている。今日はこの地区を訪れ行政、住民代表の方々から詳しいお話を伺った。確かに、一貫してコンサルタントとして事業をリードしたGさんが言うように「特例により普通のまち」ができあがっている。設計を担当したEさんとのコラボレーションも見事に成功しすばらしい住環境のまちができあがっている。行政、住民、専門家が一つの事業で「協働」を成功させた好例といえよう。しかしここでも、2.3ヘクタールの地区に、最終的には200世帯弱の地区に、おおよそ

億円の事業費(人件費、後に売却された用地取得費も含む)が投入されている。・・・もちろん92戸の市営住宅という公共財産が形成されたのであるし、周辺への貢献も大きいのではあるが。当初、市が構想していたような災害復興公営住宅をここに集中させてしまえば、従来型の公共目的は達成されたであろうが、このような質の高い住宅地にはならず、できたとしても通常の退屈な改良住宅団地になってしまったであろう。市には、今後、起債でまかなった裏負担の償還が待っているし、市営住宅の維持管理にも相当な負担を強いられる。そのような要素をこえても、なおこのような質の高い事業を正当化し一般化する論理を構築することが求められよう。・・・このような事業を単純に成功例として祭り上げるだけでは、またいつか来た道、「事業主義の罨」に陥ってしまう。』『私もこの事業は震災復興事業のまちづくりの成果として最も優れた実践の一つと高く評価します。だからこそ、きちんと理論化をしなければと考える。とにかく、単に良くできている、事業区域の地元で役立った、先導的だ、というだけでは今の時代、たとえ震災復興といえども集中的な公的資金をつぎ込む住宅改理事業の正当性の十分な説明にはならないでしょう。周辺への、あるいはもっと広く社会的な波及効果、そのことも含めて長期的には税収増なども含めて自治体財政的にも合理的であること、地域社会の安定と言うことで広域的に意味を持つことなど、今後の運営も含めて、事業の意義をさまざまな側面で、専門家は、理論的、科学的に説明しなければならないでしょう。もちろん私も含めてです。』



戸建て住宅の間に垣間見える
公営住宅



そこかしこに出現する
通り抜け路地階段



戸建て住宅と馴染むように留意された
公営住宅



自力再建した戸建て中心の
まちなみに溶け込む公営住宅

「JIA News kinki 翔」100号を迎えて

JIA近畿支部広報誌「翔」は、2006年秋号をもって発刊100号を迎えることになりました。
100号までの広報誌の変遷は次のとおりです。

- | | |
|----------|---|
| 1987年 5月 | 「新日本建築家協会」発足 |
| 1987年10月 | 近畿支部広報誌「JIA NEWS近畿」第1号創刊 1～7号までは新聞記事を転載して事務局で編集 約2ヶ月に1回の発行：約15頁の小冊子 |
| 1989年 4月 | 第8号より広報委員会編集により年2回の発行。
表紙デザインを刷新し広報誌の体裁が完成：約20頁の小冊子 |
| 1994年 7月 | 第17号 表紙デザインをリニューアル。年2回の発行。 |
| 1996年 6月 | 「日本建築家協会」に名称を変更 |
| 1996年 7月 | 広報の速報性を重視し第23号より毎月の発行に変更 併せて表紙デザイン・内容を刷新：約15頁の小冊子 |
| 1998年 7月 | 第44号から「第三種郵便」での郵送になる。「読み物」として紙面充実。住宅部会の協力を得て、当時充実した内容であった「住宅部会通信」を 吸収合併。表紙刷新・縦書フォーマット・連載記事の導入他抜本的に紙面改定し、現在の広報誌のベーススタイルが完成約20頁の小冊子 |
| 2002年 5月 | 第81号より名称を「JIA News kinki 翔」に改訂。
表紙を刷新するとともに経費削減のため季刊発行に変更（2ヶ月に1回） |
| 2003年 5月 | 速報性の充実を目的としてFAX・メールマガジン「JIA News kinki 翔」を毎月発行。適宜臨時発行も継続中 |
| 2005年 7月 | 更なる経費節減を目指して第94号より紙面版での発行を中止。
Web版（ホームページでの公開）に変更。 |

100号の発刊を迎えて、歴代広報委員長の皆様から広報誌の思い出・今後のあり方、支部広報の今後のあるべき姿他について、ご意見をいただきました。財政難の折「広報誌も廃刊すべきではないか」と言われた時期もありましたが、何とか100号の発刊に漕ぎ着けることができました。ご執筆いただいた皆様にもご多忙の中時間を割いていただき、貴重な原稿をいただきました。ひとえにJIA会員諸氏、会員以外のご執筆者の熱意の賜物と感謝しております。
発刊100号を節目として更に充実した広報誌の発行、いつも話題に登りながら依然として効果的な進め方が見えてこない「対外広報」等、広報委員会に与えられた課題克服に向かって思いを新たに取組んで行こうとしております。

（広報委員会）



第1号創刊号



第8号



第17号



第23号



第44号



第81号



寺本 敏則

(E環境設計・元日建設計)

「予算、魅力、速報、感動」がテーマであったとき

あれはもう15年も前のことになるのだろうか。

大西孝夫さん(日建設計)が拙卓にこられて、「あんな、JIAの広報委員ができてな、これやってくれんか」・・・JIAの、と聞いたとたん顔が引きつった次第。

「あんな、JIAの機関紙な、“JIAニュース近畿”言うんな、キミ読まへんやろけど、もう一つなんよ」・・・さらに小生の頬が歪んだところ、「キミな、日建(大阪)ではJIA会員が35人もいるんだが、だれか1人はJIAの役をやってくれんといかんよ」・・・だからナンなのと居直ると、「これな、存分に“予算”使って“魅力的”にしてくれんと、すぐに棄てられてしまうんよ。表紙なんか厚手にして。ニュースなんやから“速報性”が大事なんよ。毎月出して。それに頂く原稿がどれも玉稿でな、コミュニケーションは大切なんやから読み手を“感動”させてほしいんよ」・・・

・・・「予算、魅力、速報、感動」は、とたんに小生の視床下部をくすぐった次第。

第一回の広報委員会でフタがあくと、案の定どれをとっても難題となって立ち塞がった。西部支部長と羽賀事務局長が、気負いがちな私達を気遣ってくれた。辛うじて表紙を色厚紙にデザインも刷新して20頁の小冊子の体裁に仕上がったが、速報性どころか年2回の発行が精一杯。更に次世代に期待を託すことになった。

今にして当時を思い返すと、「予算、魅力、速報、感動」は実現できたとは言えないわけだが、せめて現在の広報のあり方にも通じる、源流のようなものとなったのであろう。

このときに得た「感動」のことは、やがて小生の座右の銘となったのだが。



佐々木 純一

(佐々木建築事務所)

発足時の思い出

新日本建築家協会発足の頃の広報は旧「大阪建築設計監理協会」時代に業界新聞や一般紙のニュースを切り貼りをA3版の大きさに編集、定期的に会員に配られていたのを小冊子に編集したもので派手さはないけれど速報性には優れたものでした。

新組織が確立するにつれ速報性に加え年間テーマに沿った会員の寄稿を中心にした編集体制に移行しましたが、年間2冊の会報にせよ28ページの盛り沢山の内容の企画、原稿集め、締め切り等々問題がある中で順調に出稿できたのは会員の協力や事務局の努力のおかげと感謝しています。会報誌はその後ニュース性を求め季刊から隔月刊、月刊誌に方針変更していきました。

広報誌への思い

太田 恭司
(日本設計)



阪神淡路大震災の記憶がまだ生々しい時期に、広報委員長を佐々木さんよりバトンタッチしました(1997)。丁度そのころに広報誌のあり方や、発行部数等、改変の時期にきており当時の広報委員の皆様と夜遅くまで議論したことを懐かしく思い出します。毎月発行する方向で決定されましたが、いざ始まると結構忙しく、原稿や広告取りに奔走し、その忙しさの中で仲間意識も芽生え、私にとって大変貴重な時間をすごしました。又、<拡大広報委員会>なるものを各地域会に出向いて開き、会員の皆様から直に話を聞いたり、懇親会を持ったりして多くの仲間と知り合えたのも、私の財産として大事にしています。

今後会員相互が様々な立場を乗り越えて一致団結し、私達の活動が発展してくれたら幸いです。最後になりますが、委員長時代に私を支えてくれた、井上さん、小池さんをはじめ広報委員の皆様へ深く感謝いたします。

JIA近畿広報誌雑感

井上 守
(井上守建築事務所)



印象に残るのは、第三種郵便認可に向け広報誌の全面改訂を目指した副委員長時代(1998年頃)です。何となく編集長?みたいな立場を仰せつかり、横書から縦書への変更、表紙デザインの抜本的刷新、特集・連載の設定他、広報委員諸氏と相当の日数をかけて検討した結果、何とか第三種の認可がとれた時は、全員で歓声を挙げたものでした。会員向けの会報誌ではなく、一般向けの書物であることが第三種認可の前提だったものですから大変でした。

印刷物としての広報誌は休止となりましたが、現在の広報誌のベースが築かれた時期かもしれません。

「JIA NEWS KINKI 翔」100号に沿えて

小南 一郎
(現広報委員長)
(小南一郎建築研究所)



1999年4月、住宅部会の代表就任と同時にこの広報委員会のメンバーに参画しましたが、当時は、対外的にも活発に活動を展開していた住宅部会の情報・部会通信の記事が、本機関誌に掲載され始めた頃でした。2002年4月、前任の井上氏より広報委員長を引き継ぎ、当時の閉塞感漂う設計界の雰囲気を一掃したい想いから、この機関誌に「翔」という名を与え、「和」を意図したデザインに表紙を刷新しました。支部財政事情から、昨年夏号よりWEB版となりましたが、タイムリーな情報はFAX通信及びメルマガ「翔」に委ね、本誌は、じっくりと読み応えのある記事・内容を持って充実させ、誌面のカラー化と相俟って、より密度の高い機関誌として各方面より評価を頂いております。

本誌100号を一つの区切りとして、更なる誌面の充実を目指し、広報委員会一同頑張っ参りたいと思いますので、今後も、会員諸氏ほか関係各位のご助言・ご指導をよろしくお願い致します。

新入会員紹介

兵庫県	戎 孝之	黒田建築設計事務所
大阪府	朝野佳典	梓設計 大阪支社
大阪府	奥長隆敏	日建設計
大阪府	垣口知久	日本設計 関西支社
大阪府	影林督諭	安井建築設計事務所
大阪府	工藤昌宏	リビングアーバン設計事務所
大阪府	竹原秀樹	日建設計
大阪府	堀井一孝	日建設計
大阪府	村本和博	日建設計
大阪府	山本武志	日建設計

編集後記

去る11月9日・10日の2日間を中心に、古都奈良に於いて、JIAの全国大会「建築家大会2006奈良」“時を紡ぐ”が開催されました。

小春日和の温かさの中、全国から約700名が参加し、各分科会での討論・作品賞の展示UIA等外国からの建築家を招いてのメイン式典・基調講演・舞楽演奏・パネルディスカッションその他数々の催し、協賛企業を中心としたお祭り広場等盛りだくさんのイベントが行われました。財政問題、建築士資格問題、真の建築家職能の確立等、JIAの内外に数多くの問題を抱えながらも、このように年に一度、全国の数多くの建築家が一堂に会して話し合い、親睦を深め合う機会の大切さを今回丸2日フルタイムで参加する中で、改めて実感した次第です。10日夕刻よりのレセプションパーティー、紅葉の古都奈良をバックにしたのオカリナ演奏は秀逸でした……

この大会の関連イベントとして大阪堂島アバンザで11月8日～16日の間、日韓住宅作品展が催された。その初日には、韓国から3人の若手建築家を迎えたシンポジウムが中ノ島中央公会堂で行われ、日韓の微妙な文化の相違を感じさせる新鮮な現代住宅を拝見することが出来ました。また、その設計者から直に解説を聞いたことは、西欧にばかり目を向けがちな日本の建築家に、現代アジアの建築・建築家の面白さを理解させる絶好の機会となったと思います。今後の展開が期待されます。

以上、今大会の関係者の皆様本当にご苦労様でした。末筆になりましたが、今回は、本機関誌の100号記念号となりました。WEB版ではありますが一応のご報告を本文に入れておきますので、お読みいただければ幸いです。

(広報委員長 小南 一郎)

広報委員会

委員長	小南一郎(大阪)
副委員長	小池啓夫(大阪)
委員	足立成美(京都) 一尾晋示(大阪) 井上 守(大阪) 太田恭司(大阪) 木戸口浩之(京都) 瀧川嘉彦(和歌山) 佐々木純一(大阪) 佐藤洋司(大阪) 柴田敬二郎(奈良) 内藤 正(滋賀) 森崎輝行(兵庫) 横関正人(大阪) 大江一夫(住宅部会長)
事務局	穴井宏樹 木田明生 緒方英輔
発行日	2006年12月15日(秋号)
発行人	吉羽逸郎
発行	社団法人 日本建築家協会近畿支部 〒541-0051 大阪市中央区備後町2-5-8 綿業会館 TEL06-6229-3371 FAX06-6229-3374 ホームページ http://www.jia.or.jp/kinki メールアドレス jia@bc.wakwak.com

表紙 水墨画「凜 Rin」(大江一夫)